

# Glocal Tenri



1

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.19 No.1 January 2018

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
キーワードは「我が事・丸ごと」  
／高見宇造…………… 1
  - ・ 天理教教理史断章 (124)  
勢山文書⑤「おさしづ」の写し翻刻  
／安井幹夫…………… 2
  - ・ 「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」  
的世界観への未来像～ (45)  
第6章 吉本隆明と『思想のアンソロジー』④  
／井上昭夫…………… 3
  - ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道  
の様相 (13)  
戦前のハワイ伝道と日系移民社会③  
／尾上貴行…………… 4
  - ・ 「おふでさき」の標石的用法 (29)  
動詞について⑭  
／深谷耕治…………… 5
  - ・ 「おさしづ」語句の探求 (27)  
「おさしづ」第3巻における「刻限」と「道」  
／澤井治郎…………… 6
  - ・ ライシテと天理教のフランス布教 (13)  
ライシテの歴史⑩  
／藤原理人…………… 7
  - ・ 現代世界に生きる「人間」と「宗教」—再考— (1)  
「わたし」は誰? —人間存在と意味世界—  
／岡田正彦…………… 8
  - ・ 遺跡からのメッセージ (30)  
金岡恕名誉教授の卒寿を言祝ぐ  
／桑原久男…………… 9
  - ・ 現代宗教と女性 (18)  
「女帝」の歴史と近代日本  
／金子珠理…………… 10
  - ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係  
試論 (14)  
植民地統治とキリスト教②  
／森 洋明…………… 11
  - ・ 平成 29 年度公開教学講座要旨:『逸話篇』  
に学ぶ (3)  
第6講: 48「待ってた、待ってた」  
／佐藤浩司…………… 12
  - ・ English Summary…………… 13
  - ・ おやさと研究所出版物一覧…………… 14
  - ・ おやさと研究所ニュース…………… 15
- 新連載執筆のねらい／第29回日本生命倫理学会年次大会に出席(堀内みどり)／『グローカル天理』年間購読のご案内／「出前教学講座」申し込み受付／研究所ホームページのご案内／『グローカル天理』合本のご案内／平成29年度「教学と現代」／平成30年度公開教学講座

## 巻頭言

### キーワードは「我が事・丸ごと」

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

新年あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひいたします。

教祖130年祭を勤めて本年は2年目の初春を迎えます。おやさと研究所としてもより一層、充実した研究活動に努めたいと思います。ところで昨年7月、厚生労働大臣を本部長とした「我が事・丸ごと地域共生社会実現本部」が設置された事をご存知でしょうか。お役所が考えたとはとても思えないこのキーワード「我が事・丸ごと」は、それだけ喫緊課題であることが逆に感じとれました。

同本部発表の「当面の改革工程」によれば、「制度・分野ごとの『縦割り』や『支え手』『受け手』という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が『我が事』として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて『丸ごと』つながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会」を目指としています。

こうした取り組みの背景として従来の障害者や高齢者、子どもなど対象を区分する「縦割り」の公的支援制度には限界がある事を指摘しました。例えば介護と育児が同時に必要になる「ダブルケア」家庭の増加があります。またガンをはじめとして精神疾患や難病患者等の長期疾患に対応するには保健、医療や就労など個別の対応では救えません。いずれも複数の分野にまたがった複合的な支援が必要になります。一方で公的支援制度では対象にならない身近で大切な生活問題があります。2035年には高齢者の5人に1人が認知症になると予測されますが、例えば「認知症者の見守り」をはじめとして、「ゴミ出し」「買い物、通院移動」など、心配事は挙げれば切りがありません。とても「他人事」では済まない事です。「工程」ではこの「縦割り」と「他人事」と考える弊害を強調し、「つながりの再構築」

を強調しています。

昨年、私は「ソーシャルワーク学会」(11月19日・日本女子大学)に出席しましたが、生活困窮者自立支援法が検討されました。生活困窮者には共通点があります。それは病気、失業、家庭など複数の課題が重複し、加えて誰ともつながらず社会から孤立している点が指摘されました。何よりも包括的な支援、また「つながりの再構築」が求められます。行政の支援では、一時は立ち直れても、元に戻ってしまいます。社会とのつながりを強め、周囲から受け入れられている実感を得る事が自立に向けて必須条件になると報告していましたが、これも「我が事・丸ごと」の意味するところでしょう。

特に議論が求められるであろう「我が事」については①「自分や家族が暮らしたい地域を考える」という主体的・積極的な組織の広がり、②「地域で困っている課題を解決したい」という気持ちで活動する住民の増加、③「一人の課題」について解決する経験の積み重ねによる誰もが暮らしやすい地域づくりに方向性を置いています。厚生労働省は2020年代初頭には関連法制度の改革を目指していますが、まずは私たち一人ひとりが住んでいる地域をどのようにしたいのか、また何ができるのかが問われてきます。

申すまでもなく、私たちは「論達第3号」を拝読し、「おたすけは周囲に心を配ることから始まる。身上・事情に苦しむ人、悩む人があれば、まずは、その治まりを願ひ、進んで声を掛け、たすけの手を差し伸べよう。」と繰り返し口にし、その実践に努めてきました。今、私たちの思いにこうした「我が事・丸ごと」という言葉が重なってきたと考えるのは私だけでしょうか。国は何をどのように進めていくか、私たちはよく見守りながらも、この思いを大事に育てて行きたいと考えています。